

男性学と「生きづらさ」

昭和大学 須長 史生

1 目的

本報告の目的は、現在の日本の男性学の中心的なテーマとなっている男性の「生きづらさ」について、その概念が置かれた独特のジェンダー的位置づけを明らかにすることにある。日本の男性学の理論枠組みの特徴は、男性問題を「女性による男性差別」におかず、「男性による男性差別」あるいは「ジェンダー規範による男性抑圧」とするところにある。この特徴は多くの知見をもたらしたが、他方で研究対象や考察に意図せざる制約をもたらしたともいえる。本考察を通じて、男性学の主題である「生きづらさ」の困難さについて明らかにしたい。

2 方法

男性の「生きづらさ」を主題とする論文や著作を資料に分析を行う。そこにおいては論ぜられる「生きづらさ」の構造や原因、およびその克服の方向性などを題材に、それらについてジェンダー規範の扱いや、(もしあれば) 発生原因となる他者の性別が考察対象となる。

3 結果

「男性学」の論文で、男性の「生きやすさ」の追求が女性の権利と衝突し、それでも「生きやすさ」を優先しようとするものは現時点では管見にしてみつけられない。男性の「生きやすさ」の追求のすべてが女性の権利と両立したり、ジェンダーバイアス批判につながるわけではないとするならば、そこには男性学としての何らかの思いが映し出されている可能性がある。しかしそれは結果として、男性性研究からある種の問題群を排除したり、ある種の考察を回避することとつながりかねない危険性をも内包してしまっている。

これまで日本の男性学は、その問題関心の内閉性や権力関係に対する無関心さが指摘され批判されてきた。しかしそれは、単なる関心の狭さや問題意識の低さだけに起因するものではないのかもしれない。

4 結論

男性の「生きづらさ」の問題は、皮肉にも男性学の「生きづらさ」を象徴的に示す場となってしまっている。しかしだからといってこれまで(そして現在も)男性学が取り組んでいるテーマや知見の重要性が低下するわけではない。男性学が一層の発展を遂げるためにも「生きづらさ」問題と正面から取り組むことは避けて通れない道である。

文献

伊藤公雄,『<男らしさ>のゆくえ』 新曜社

宮台真司・辻泉・岡井崇之(編),2009,『「男らしさ」の快樂』 勁草書房

渋谷敦司,「男女の生きにくさの理論化と家族研究」(『家族研究年報 27』 家族問題研究会)

渡辺恒夫,『脱男性の時代』 勁草書房